

## 新規就農をめぐる最近の状況と担い手問題

(社) 北海道地域農業研究所 常務理事 黒澤 不二男

### 一．新規就農動向調査から

この六月に道農政部は、平成十八年の新規就農者の平成十八年の調査結果を発表した。

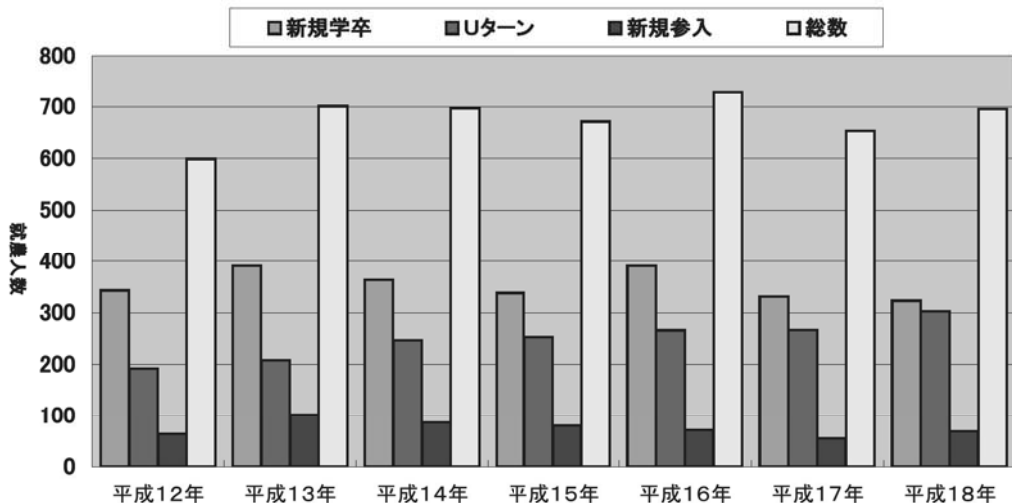
総数で六九五人と平成十七年の六五三人に比べ僅かながら増加している。

本道の農家戸数は年々減少しており、平成十七年の総農家戸数は六万戸を割り込み約五九千戸となっている。このような中であつて、その調査結果では、学卒後間をおかず就農する新規学卒就農や、いったん他産業等に就業後、親の営農を後継するため帰郷して就農するUターン就農とまったく農業・農村との関わりがなかったのに農業の魅力に惹かれ、その夢を農場運営に託す新規

参入という三つの就農パターンに大別されている。調査では市町村ごとに情報が収集されているので全道を俯瞰するとともに地域ごとの傾向をも見る事ができるといふ貴重なデータである。

図では直近七年間の推移と表では支庁別の人数や営農形態、就農時年令をまとめて示してみた。

平成十二年から十三年にかけて一〇〇名ほど増加して七〇〇人台に到達、その後はおおむね700人前後で推移している。就農パターン別では、年次によって変動があるが、おしなべると新規参入が一〇%、学卒就農とUターンは五〇%と四〇%程度のウエイトとなっている。表では各支庁別の状況を示したが、単なる絶対数の大小ではなく母集団の農家戸数との関連でみる必要があるの  
で、就農者数を農家戸数で除した数値を、仮に就農比率と名付けて表中に示した。当然のことながら、農業のウエイトの高い支庁



就農動向の推移

の就農者絶対数は大きいですが、就農者比率でみると十勝、網走に次いで根室が三番目となっているのが注目される。同様に全道市町村別に就農者数の上位をみると、十人以上の市町村は二一市町村を数え、首位が帯広市の二九人、次いで清水町、別海町の二一人、以下幕別町二〇人、北見市一九人、芽室町一六人と続いている。これを就農比率の順位で見ると、首位が道南渡島支庁の知内町、ついで十勝管内の上士幌町、大樹町、更別村と十勝管内の町村が上位にランクされているのが注目される。首位の知内町に代表されるように、地域でその立地特性を活かした農業を元気に展開している農村では就農者が増加の兆しをみせているという証しとして喜ばしいことではなからうか。この知内の際だった特徴としてはUターン就農の比率が高いことが挙げられる。特産のニラ栽培による高収益農業が若者を故郷に誘引していると考えられるのである。

このように、一部では歓迎すべき現象が見受けられるが、総じてみれば、年々の離農・脱農戸数を充足するほどの就農者数ではないことも厳然とした事実である。したがって担い手確保対策は、現下の本道農業にとって最重要課題で、関係者あげて魅力ある農村、やりがいのある農業経営を実現するための環境整備に取り組む必要がある。

平成18年支庁別就農状況

支庁	就農者数	就農パターン			営農形態							年齢階層				就農比率
		新規学卒	Uターン	新規参入	稲作	畑作	酪農	肉牛	野菜	花き	その他	35歳未満	35～45歳	46歳以上	不明	
石狩	25	5	13	7	10	7	2	0	4	0	2	15	5	4	1	0.72
渡島	32	11	19	2	4	0	8	1	14	5	0	28	4	0	0	1.34
桧山	8	3	3	2	0	4	0	3	1	0	0	5	3	0	0	0.46
後志	28	12	14	2	5	15	2	1	2	0	3	21	3	2	2	0.86
空知	103	42	55	6	81	11	1	0	7	3	0	89	10	4	0	1.07
上川	91	44	32	15	39	23	14	3	11	0	1	80	9	2	0	0.96
留萌	13	9	3	1	0	2	10	0	0	0	1	13	0	0	0	1.00
宗谷	13	10	2	1	0	0	12	1	0	0	0	13	0	0	0	1.74
網走	125	63	58	4	2	78	32	3	10	0	0	122	3	0	0	2.30
胆振	19	5	12	2	3	8	1	1	2	0	4	18	1	0	0	0.78
日高	13	2	7	4	1	0	3	2	1	1	5	11	1	1	0	0.71
十勝	176	99	63	14	0	132	51	4	2	0	3	182	8	2	0	2.74
釧路	17	3	10	4	0	0	17	0	0	0	0	16	1	0	0	1.16
根室	32	15	12	5	0	0	31	0	0	0	1	30	1	1	0	2.08
北海道計	695	323	303	69	150	262	180	16	59	8	20	627	49	16	3	1.36
構成比	100.0	46.5	43.6	9.9	21.6	37.7	25.9	2.3	8.5	1.1	2.9	90.2	7.1	2.3	0.4	—

注) 就農比率＝就農者数÷販売農家数×100

一・就農から営農安定化を実現した軌跡を見る

新規就農を支援する機関として、「北海道農業担い手育成センター」の果たしてきた役割は大きく、創設以来、就農を希望する数多くの人々を物心両面にわたって支援し、その支援の生きた証しとして各地に根付いた農業者の事例も多い。その「担い手センター」では支援事業の一環として、就農してから努力を重ねて経営状況も安定し、既存の農業者の方々から仲間として認知されるようになった事例の中から、特に優れた農業者を表彰する「新規就農優良事例表彰コンクール」を開催している。筆者も三年ほど前からその選考過程に関わるようになった。毎年、受賞した方々は、就農にいたる意欲、経営成果、地域における生産・生活の両面における定着度、地域に対する貢献など、いずれの側面から見ても優秀で、いずれも甲乙つけがたく審査に当たる関係者も選考に苦慮するのが常態となっている。ここで十九年度コンクールで受賞した四名の方々の軌跡を紹介してみたい。

最優秀賞の蘆田裕介さんは三五歳で兵庫県但馬市出身、露地のだいこんを主体とし、これにスイートコーンを組み合わせた経営を行っており、だいこんは青果業者を通じて道内外のコープ等に出荷、一部は農協へも出荷している。満五年間の研修期間を終え

平成十二年四月に就農、現在七年目を迎える新規参入者で、耕地面積の一二haは全面積借地であるが、そのうちの六haは農地保有合理化事業の借り受け農地で近い将来には取得予定となっている。

経営の特徴としては、就農以前から持ち続けていた有機栽培に対する夢を実現するために、全ほ場において特別栽培（無化学肥料、減農薬）とほぼ同等の栽培を行っている。

特にだいこんの作付比率が高いことから、計画的な土壌診断に基づく施肥管理や輪作の実施、病害虫予察に基づく適期防除などに努め、製品のロスを最少限に抑えることによつて所得の安定確保に結び付けている。さらに、近年では、土壌の性質や地域の氣候に適した新しい作物（水菜、ささげ等）の栽培研究や漬け物等の農産加工も視野に入れるなど、その先駆性・先進性は地域でも高く評価されている。

つぎに優秀賞となつた重田順栄さんは、ハーブや花の栽培で有名な道央の由仁町で平成十年、二一歳で父の経営に参画、就農後九年を経て現在三十歳。耕地面積は借地の二二haを含む四四haで地域における大規模経営を営んでいる。基幹作物は水稻であるが、畑作四品の作付けも輪作体系を重視した作付を展開。一部生産物の直売も実施、消費者とのふれあいを重視している。また平成十四年には北海道農業士の認定も受け、経営の中での父とのパート

ナーシップを強化、豆類や比較的収益性の高いナガイモ、カボチャの導入を提案し、これが現在の基幹的な作目部門となっている。また平成十一年と十五年で規模拡大をしたが、現在の負債残高は、取得農地との相対関係でみると安全圏と目され、高い経営の安定性を誇っている。さらにJ A 青年部活動や4 Hクラブ活動で地区や道段階の役員を歴任、若手リーダーとしての資質を磨き、人脈を積極的に広げている。

同じく優秀賞の今尚春さんは三十歳、オホーツク沿岸の宗谷管内枝幸町で昭和六三年に二十歳時点で父の経営に参画、就農後十年を経て現在三十歳、酪農專業経営に取り組んでいる。耕地面積七七haで乳牛一七〇頭（経産牛一二五頭）を飼養。農大卒業時に取得した家畜人工授精士の資格などを活用しながら地域の酪農ヘルパー組合のサブヘルパーとして酪農技術に磨きをかけ、「宗谷らしい、草地を活用した大規模酪農」を目指している。

また4 Hクラブの主要メンバー・リーダーとして学習活動等に積極的に参加。そのプロジェクト活動の一環として農場の経営改善のため「フリーストール・ミルキングパーラー方式」の計画案を主体的に作成、父の合意を得て施設投資に着手、現在の経営基盤づくりに貢献している。またコスト低減のためのコーンサイレージの導入を図るなど経営内における役割は不動となっている。さらに今農場は町を代表する経営モデル（類型）と位置づけられ

るに至っている。

同じく優秀賞の吉田邦博さんは、黒毛和種の飼養や花きのデルフィンニーム栽培で知られている日高管内の新ひだか町（旧三石町）で自動車整備士等の就業体験の後、父の経営に参画したのが平成九年、就農後十一年を経て現在三七歳。

耕地面積は一四・二ha、ハウス施設は六棟（延べ面積一、三八六㎡）で稲作と施設園芸に取り組んでいる。平成十二年には、父から経営移譲を受け、これまでの稲作、農用馬生産中心の経営に、新たに平成十四年に町の重点振興作物となったアスパラガス立茎栽培を組み入れた経営を展開し、安定した収益の確保に努めている。また、家族労働力の効率化を図るために、水稲、アスパラ、肉用馬の各部門別の繁忙期の労働が競合しないように労働配分に留意。さらに、近隣の黒毛和牛飼養農家と連携し、余剰稲わらと堆肥交換による「土づくり」や減農薬米づくりに取り組むとともに、自動車整備士としての技能を活かして、作業機械等の保守管理を始め、ビニールハウスの建設や修繕、圃場暗渠、選荷場設置などを全て自力によって行うなど、経費の節減による堅実な経営を実践している。

以上の受賞農業者に共通した特質として、①新しい技術方式や販路開拓などへのチャレンジ精神の旺盛さ、②熱心な自己研鑽努力、③地域内外との密接な人的ネットワークの重視、④パート

ナーである妻や両親との円滑なコミュニケーションと役割分担の明確化、を挙げることができる。このような資質や取り組み姿勢は、新規就農者に固有的に求められるものではなく、いま農業経営者に普遍的に求められているものであるとの感を持つとともに、北海道農業が現下の厳しい状況をクリアする最大の拠り所は、このような人材にあると確信したところである。

連ドラ『風林火山』の主人公として登場している甲斐の武田信玄ではないが、まさに「人は石垣、人は城」ということであろうか。

